

## 大逆転負けに関する研究

—大学女子バスケットボールの試合の分析を通して—

### A Study on the Come-from-behind Loss

—Based on an analysis of the results of  
women's college basketball games—

岩 田 真 一

*Shinichi IWATA*

#### Abstract

This study targeted a basketball game and focused on the games in which a team blew the lead and lost the game though it had widened the gap and had taken a big lead at some point during the game. The purpose of the study was to analyze the following matters and to review how a team blew the lead and lost the game. The matters were as follows: ① How many points could be turned around? ② How often did such a game occur? ③ If a team took a big lead, how was the subsequent intermediate step of the game?

The surveyed games were 336 in total in the Kanto Female Students Basketball Tournament (First division) during 6 years from 2001 to 2006.

According to the survey results, there were multiple games in which a team blew the lead and lost the game though it had a maximum lead of 20 points at the close of the second period and a maximum lead of 15 points at the close of the third period. In 30 games, a team took a lead by 16 to 20 points at the close of the second period. Of these games, a team won subsequently in 27 games and a team blew the lead and lost the game in 3 games. The analysis of an average point scored and lost of the team having a lead showed that the team had gained fewer points and had given more points away in the third period rather than in the second period on a statistically-significant level.

According to these analyses, it became clear that the team taking a big lead at the close of the former part of the game (the second period) had not been able to gain more points and overpower the opposing team as energetically as ever in the third period just after widening the gap, aside from the result whether it had finally won or lost the game. And this was considered to be one of the causes for a team to blow the big lead and lose the game.

*keywords : the come-from-behind loss, basketball, the 3rd quarter*

#### I. はじめに

著者の所属する大学のバスケットボールチームは、ここ数年の間にバスケットボール競技では珍しい試合を3度経験した。まず2005年関東女子学生バスケットボールリーグ戦において、前半終了時点で20点もの大差をつけられて負けていたにもかかわらず、後半に逆転して勝利を取めたのであった。また2006年関東学生女子バスケットボール選手権大会においては、逆に前半終了時点で18点もの大差をつけて勝っていたのであるが、後半に逆転されて負けてしまった。さらに2006年関東女子学生バスケットボールリーグ戦においては、第3ピリオド終了時点で15点もの大差をつけられ

日本女子体育大学（講師）

て負けていたにもかかわらず、最終第4ピリオドで逆転して勝利を取めたのであった。このようなことが身近で起こり、なぜ大逆転試合が生じたのか、ということに強い関心を抱ききっかけとなった。

バスケットボール競技にかぎらず、スポーツ競技において、試合やレースの途中のある時点で、すでに勝負がついてしまったかのような試合展開になる時がある。上述のような大きく得点差を広げてリードを奪ったときなどである。こんなとき「よし勝てる。この試合もらったな。」と、ほぼ勝利を確信するような気持ちになる選手やコーチがいても不思議ではない。応援する観衆も同様で、試合会場がそのような雰囲気にも包まれるかもしれない。しかし、その勝ったと思う気持ちが、一つひとつのプレイに、さらに作戦・戦術な

ど勝つために必要なあらゆることに対して、何らかの悪影響を及ぼす可能性があるのではないだろうか。

このような大逆転負けと呼べるような敗戦ということにかぎらずとも、そもそも勝負の敗因を取り上げた研究論文や書籍は多くない。それでもいくつか発行されており、その中のひとつに『敗因の研究』<sup>4)</sup>がある。この書のプロローグにおいて著者はこう記している。「『敗因の研究』——。取材記者にとって何ともやっかないテーマというべきであろう。栄光の座を目指していた選手が夢破れた時に、あえてその『敗因』を求めようというのである。どこかせつないものがある。直後ならなおさら、はばかりで当たり前だ。選手の過去の記憶をたどることも、当時の苦痛を呼び覚ますことにしかならないのではないか」(p.7)<sup>5)</sup>。いかに敗因を探ることが難しいかが示されている。ましてや大逆転負けのように勝利をほぼ手中に取めたような試合展開からの敗戦は、関係者に大きな心理的ダメージを与えることは想像に難しくなく、それに触れることは相当に容易でないことであると直感される。敗因に関する研究があまりみられないのは、このような背景もつからであろう。

このように、敗因、とくに大逆転負けのそれを探究した先行研究はほとんどないし、それを推し進めることは容易ではないが、スポーツ競技において大逆転負けがいかにして起こるのか、そしてどうすればそれを防ぐことができるのかを明らかにすることを目指した研究をスタートさせたい。そこで本研究では、まずバスケットボール競技を対象に、試合途中において大きく得点差を広げてリードを奪いながらも大逆転負けに至ってしまった試合に着目し、そうした試合がどれくらいあるのか、どれくらいの得点差で起こり得るのかを調査し、次にその調査結果を踏まえつつ、リードした後の得失点経過を分析し、大逆転負けに至る過程にどのようなことがあるのかを明らかにすることを目的とした。

## II. 方 法

### 1. 調査対象

調査した大会は、旧来の前後半(2ピリオド)制から4ピリオド制に移行した2001年度から2006年度までの関東女子学生バスケットボールリーグ戦(1部リーグ)とした。試合数は6年間で計336試合となった。

## 2. 分析方法

バスケットボール競技に限らないことではあるが、「大逆転」と呼べるような試合はどのような試合であるのかを定義することは難しい。そこでまず、前半第2ピリオド終了時点および後半第3ピリオド終了時点で、どれくらいの得点差が開いた逆転試合があったかを調査した。次に逆転試合の中でもより大きな得点差からの逆転試合を大逆転として捉え、そのような大きな得点差を広げたチームがその後の第3、4ピリオドにおいて、どのような得失点経過をたどったのかを分析した。

## III. 結 果

### 1. 第2および第3ピリオド終了時点での大きな得点差からの逆転試合について

表1は、第2ピリオド終了時点で大きな得点差を広げてリードを奪いながら逆転負けした試合の得点差とその試合数を示したものである。10点差以上のケースが計10試合あり、もっとも大きな得点差は20点であった。図1は、その10試合の得点差の推移をあらわした

表1 第2ピリオド終了時点での大きな得点差からの逆転試合

点差	試合数	累積数 (%)
20	1	1 (0.3)
17	1	2 (0.6)
16	1	3 (0.9)
14	2	5 (1.5)
13	2	7 (2.1)
12	2	9 (2.7)
10	1	10 (3.0)

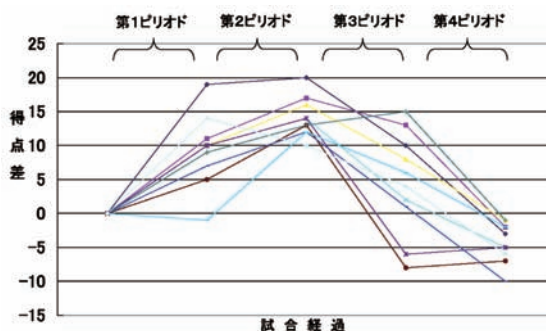


図1 得点差の推移

ものである。第2ピリオド終了時点での大きな得点差からの逆転試合の中でも、とくに大きな得点差の上位3試合は16, 17, 20点差であった。これは調査対象試合全336試合のうちの1%未満となる確率である。確率的にはめったに起こらない大逆転試合であったと捉えられる。

この3試合は、いずれも第1, 2ピリオドの両ピリオドを勝って、第2ピリオド終了時点で最大得点差となり、第3, 4ピリオドの両ピリオドを負けて敗戦に至るという傾向が認められた(図1)。またそれよりも少ない10点から14点差からの逆転試合では、第1ピリオドや第3ピリオドで最大得点差となったケースや、第2ピリオドだけ勝って、第1, 3, 4ピリオドでピリオドを負けたケースなど、さまざまなタイプが認められた(図1)。

また表2は、第3ピリオド終了時点で大きな得点差を広げてリードを奪いながら逆転負けした試合の得点差とその試合数を示したものである。7点差以上のケースが計8試合あり、もっとも大きな得点差は15点であった。図2は、その8試合の得点差の推移をあらわしたものである。第3ピリオド終了時点での大きな

表2 第3ピリオド終了時点での大きな得点差からの逆転試合

点差	試合数	累積数 (%)
15	1	1 (0.3)
13	1	2 (0.6)
12	1	3 (0.9)
10	1	4 (1.2)
9	1	5 (1.5)
8	2	7 (2.1)
7	1	8 (2.4)

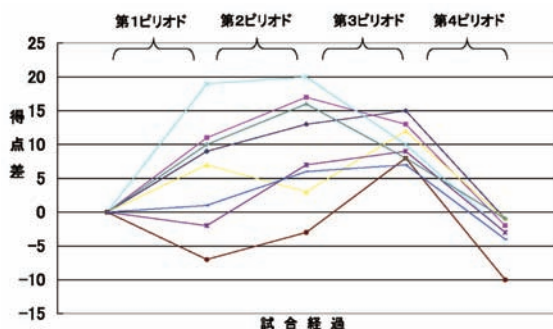


図2 得点差の推移

得点差からの逆転試合の中でも、とくに大きな得点差の上位3試合は12, 13, 15点差であった。これは調査対象試合全336試合のうちの1%未満となる確率である。確率的にはめったに起こらない大逆転試合であったと捉えられる。

この3試合は、すべて異なったパターンで第3ピリオドを終えている(図2)。ひとつは第2ピリオド終了時点で最大得点差となっている。このケースは上述の第2ピリオド終了時点で17点差がついた試合と同一である。その他、第1から第3ピリオドまでピリオドを勝って第4ピリオドだけピリオドを負けたケースと、交互にピリオドを勝って負けてを繰り返したケースが認められた。またそれよりも少ない7点から10点差からの逆転試合でも同様に、さまざまなパターンの試合展開をみせた(図2)。

## 2. 第2ピリオド終了時点で大きな得点差がついた試合のリードしたチームの得失点経過について

第2ピリオド終了時点で、16点から20点の得点差がついた試合は、上記3試合を含み、30試合あった。この30試合について、大きく得点差が開いた直前と直後、すなわち第2ピリオドと第3ピリオドのリードしたチームの得失点に注目した。図3は第2ピリオド終了時点でリードしたチームにおける各ピリオドの平均得点と対応する二つの平均差の検定(以後、t検定とする)を行った結果を示したものである。また、図4は第2ピリオド終了時点でリードしたチームにおける各ピリオドの平均失点とt検定結果を示したものである。

リードしたチームの第3ピリオドの平均得点は19.0(±4.5)点で、第2ピリオドは21.6(±3.7)点となり、t検定の結果、統計的有意差が認められ( $t=2.921, p<.01$ )、第3ピリオドは第2ピリオドよりも有意に得点が少なくなったことが明らかとなった。また、リードしたチームの第3ピリオドの平均失点は18.1(±4.6)点、第2ピリオドは13.9(±4.7)点となり、t検定を行った結果、統計的有意差が認められ( $t=3.655, p<.01$ )、第3ピリオドは第2ピリオドよりも有意に失点が多くなったことが明らかとなった。

第3ピリオドと第2ピリオドの違いが明らかになったので、第3ピリオドと第1ピリオドの平均得点と平均失点を比較した。第1ピリオドの平均得点は23.5(±4.6)点、平均失点は13.4(±4.8)点となり、t検定の

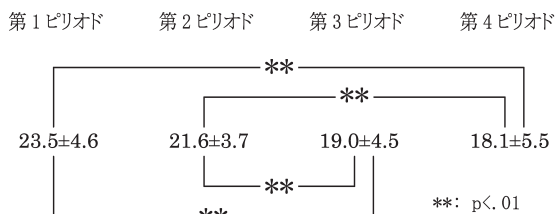


図3 第2ピリオド終了時点でリードしたチームにおける各ピリオドの平均得点とt検定結果

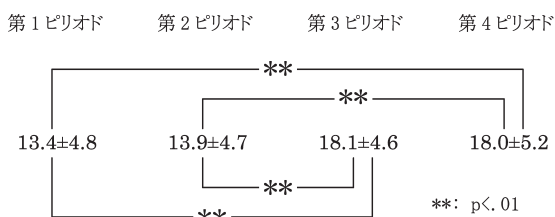


図4 第2ピリオド終了時点でリードしたチームにおける各ピリオドの平均失点とt検定結果

結果、第1ピリオドとの比較においても、第3ピリオドの方が統計的に有意な水準で得点が少なく失点が多いという結果が認められた ( $t=3.842, p<.01$ ;  $t=3.364, p<.01$ ).

さらに第3ピリオドが第1, 2ピリオドよりも得点と失点に違いが認められたので、第4ピリオドにおいても第1, 2ピリオドと比較した。そうするとリードしたチームの第4ピリオドの平均得点は18.1 (±5.5) 点、平均失点は18.0 (±5.2) 点となり、得点においては第1, 2ピリオドの両ピリオドよりも統計的に有意な水準で得点が少なくなったことが明らかとなった ( $t=4.150, p<.01$ ;  $t=3.090, p<.01$ )。また失点においても、第1, 2ピリオドの両ピリオドよりも統計的に有意な水準で失点が多くなったことが明らかとなった ( $t=4.225, p<.01$ ;  $t=3.194, p<.01$ )。

### 3. 第3ピリオド終了時点で大きな得点差がついた試合のリードしたチームの得失点経過について

第3ピリオド終了時点で、12点から15点の得点差がついた試合は、上記3試合を含み、48試合あった。この48試合について、大きく得点差が開いた直前と直後、すなわち第3ピリオドと第4ピリオドのリードしたチームの得失点に注目した。図5は第3ピリオド終了時点でリードしたチームにおける第3・4ピリオドの平均得点と平均失点およびt検定結果を示したもので

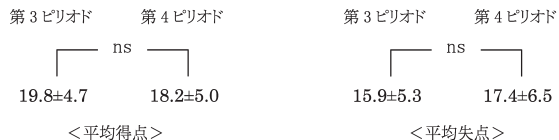


図5 第3ピリオド終了時点でリードしたチームにおける第3・4ピリオドの平均得点と平均失点およびt検定結果

ある。

リードしたチームの第4ピリオドの平均得点は18.2 (±5.0) 点で、第3ピリオドは19.8 (±4.7) 点となり、第4ピリオドは第3ピリオドよりも得点が少なくなったが統計的に有意差は認められなかった ( $t=1.614, ns$ )。また、リードしたチームの第4ピリオドの平均失点は17.4 (±6.5) 点で、第3ピリオドは15.9 (±5.3) 点となり、第4ピリオドは第3ピリオドよりも失点が多くなったが統計的に有意差は認められなかった ( $t=1.629, ns$ )。

## IV. 考 察

### 1. 第3ピリオドの重要性について

第2ピリオド終了時点で16点から20点のリードを広げた30試合について、リードしたチームの第2ピリオドと第3ピリオドの平均得点および平均失点を比較したところ、第3ピリオドの方が、得点が少なくなり失点が多くなるという結果が得られた。この結果から、第3ピリオドはその直前の第2ピリオドのときのような優勢な試合展開が出来なくなって、明らかな勢いの逆転現象が生じていたことが推測できる。さらに、第3ピリオドと第1ピリオドについても同様に比較したところ、やはり第3ピリオドの方が、得点が少なくなり失点が多くなるという結果が得られた。このことから、前半終始相当に試合を優勢に進めていたであろうが、第3ピリオドに入って、一転して劣勢にまわってしまった様子が伺える。

この30試合のうち実際に逆転負けした試合は3試合で、27試合は勝者となったわけであるが、これくらいの得点差が開いた場合には、最終的に勝つか負けるかは別として、第3ピリオドにおいてリードしていたチームが劣勢に立たされる可能性が強い傾向にあるといえるだろう。森<sup>2)</sup>は、第3ピリオドの入り方が「試合の流れとして、ある意味で、一つの勝負の決着がつく瞬間なのではないか」(p.16)と述べているが、本研究の結果からも第3ピリオドの戦い方がとても重要にな



ると考えられた。言い換えれば第3ピリオドの戦い方の失敗が大逆転負けを生じさせる一つの要因になるのではないかと考えられる。

さらに、リードしたチームの第4ピリオドと第1、2ピリオドの平均得点および平均失点を比較したところ、第4ピリオドの方が、得点が少なくなり失点が多くなるという結果が得られた。第4ピリオドにおいても、第3ピリオドと同様の結果となり、第3ピリオドに引き続いて第4ピリオドも第1、2ピリオドと比べて劣勢な試合展開となっていたことがわかる。このことから、第2ピリオドまでは優勢に試合を進めてきたとしても、その後ひとたび劣勢にまわってしまうと、最後までその勢いを取り戻すことが困難になることを指し示しているのではないかと考えられる。そのような意味からも、第3ピリオドでいかに優れた勢いを持続させられるかということが重要になる。そして、それが大逆転負けを防ぐことにつながるのではないかと考えられる。

## 2. どんな状況でも最後まで必死に戦うことの重要性について

大逆転負けがなぜ生じたのかを考える場合、体力面、技術面、戦術面やコーチの指揮の面など、さまざまな要因が関与していると思われるので、多くの観点から検討されなければならないが、本研究では選手心理に焦点をあてる。

4ピリオド制で行われている現在のバスケットボール競技において、第2ピリオドが終了したときは全体の半分が経過しただけなので、まだ勝負の行方、勝つか負けるかを予測することは容易でない。しかし、この時点で16点から20点もの得点差を広げれば、チームに相当の勢いがあったであろうことは前述した通り明らかであるし、選手の気持ちとしては試合を優勢に進めているという強い実感を抱いていたに違いない。そのため、このままの調子でいけば、ほぼ勝利は間違いない、と思う気持ちが湧き上がってきていたとしてもなんら不思議ではない。

このような選手心理の影響について、バスケットボールナショナルチームにおいても生じた大逆転試合を参考にすることができる。2006年8月、FIBAバスケットボール世界選手権（男子）グループゲームラウンド・グループB（6チーム）第4戦、日本代表とニュージーランド代表との試合は、試合途中に大きく得点差を広げてリードした日本代表が敗れた。日本代表は前

半第2ピリオド終了時38対20と18点もの大きなリードを奪いながら、後半得点差を締められ57対60と大逆転負けを喫することになってしまった。

この試合の敗因について、中心選手の一人である折茂選手は「相手はファウルトラブルで、強いプレイをすればフリースローをもらえる状況の中で、外から何度も何度もアタックもせずに打ってしまった。そういう一人一人の無責任なプレイや人任せのプレイが出た」(p.11)<sup>1)</sup>と試合後の記者会見でコメントしたとされ、大きなリードを奪った後、積極的な攻撃をできなかったことが敗因と指摘した。

本研究において、第3ピリオドと第4ピリオドは第1、2ピリオドよりも得点が少なかったことが明らかとなったが、上記事例のように、おそらく大きな得点差を得ると安心してしまい、それまでのような積極的姿勢で攻撃することができにくくなるのではないかと考えられる。

また、冒頭で述べた2006年関東学生女子バスケットボール選手権大会における、前半終了時点で18点もの大差をつけてリードしていながら後半に逆転されて負けてしまった試合の第3ピリオドの戦い方を分析した研究<sup>2)</sup>においては、第3ピリオドのディフェンスがとても消極的になってしまったことが大逆転負けにつながってしまったのではないかと指摘された。この試合第3ピリオドにおいて「簡単なショットを許しては失点し、さらにリバウンドボールを奪われて失点するなど、準備してきたディフェンスが全く実行できなくなり、点差がみるみる縮まってしまった。とくにリバウンドショットを立て続けに決められていることから明らかのように、ニュートラルボールに対する執着心が著しく欠如してしまった」(p.130)<sup>3)</sup>ということである。

本研究の結果において、第3、4ピリオドは第1、2ピリオドに比べて失点が明らかに多くなっているが、簡単にショットされないように必死にボールを追い回すとか、ニュートラルボールになった際に必死にボールを奪い取りにいくなどのディフェンス時のボールへの執着心の低下など、積極的姿勢で防御することができにくくなってしまったのではないかと考えられる。

上述した2つの事例から浮かびあがってくるのは、リードしたチームの選手の必死さとか積極性といった戦う気持ちの強さの重要性である。リードされた方は当然必死に戦ってくるので、リードした方は相手チームの攻勢を当然あるものとして警戒しなければならな

い。その意味でリードしているチームにとっても後半の戦いは厳しいものとなるに違いない。相手チームの必死さと同レベル以上の必死さが発揮されなければ流れが変わってしまうかもしれないのである。

試合の勝敗、勝負の行方がどうなるかわからないうちは、誰も必死になって対戦相手よりも勝利に近づくために戦う気持ちを喚起させることが出来る。それは、勝ちたいという未来の願望や欲求がそれを容易にしているのであり、勝ちたいという気持ちは勝てるかどうかかわからないときほど強くもてるのである。おそらく前半リードしてきたときには必死になって戦っていたのであろう。しかし、勝てるかどうかかわからないという状況から、大方勝負の行方が見えてきて、勝てる感じが強くなるにしたがって、勝ちたいという気持ちが薄れてしまったのではないだろうか。

相手も点を取っていくわけであるから、こちらも得点を重ねていかなければリードした分も守れないはずであるのに、得点することに対する積極性がなくなってしまふ。あるいはディフェンスの際に相手ボールやニュートラルボールを必死にとりにいくというような防御の積極性がなくなってしまふ。いずれもとても受け身の構えであり、このような状況を指して「守りに入る」と表現されるのかもしれない。

これに関連して岡沢<sup>9)</sup>は「リードされている選手が守りに入ったら、逆転はあり得ません。リードしている選手が守りに入り、リードされている選手が思い切り向かっていく——逆転はそのような時にもっとも起こりやすくなります。つまり、『守ったほうが負ける』ということです」(pp.119-120)と述べている。リードを守ろうという気持ちで戦うのではなく、最後まで必死になってボールを奪い、ひとつでも多くショットを打つという積極的な攻める気持ちが大切であるということである。

とくにリードしたチームにおいては、おそらく前半は守ろうという気持ちはなかっただろう。必死になってオフェンスもディフェンスもしていただろう。要は、それを最後まで続けるということが大切になるのだろう。

このように考えてみると、リードを奪った後の選手一人ひとりの気持ち、積極性、必死さとかボールへの執着心、というものがとても重要になるのではないかと考えられる。そして、そうした気持ちが薄れたときに、大逆転負けを生じさせる芽が出てきてしまうのではないだろうか。

### 3. 試合終盤での大逆転試合について

ここまでは、試合途中の半分を折り返したあたりまでの時点で大きくリードしたチームが逆転負けをするケースについてであった。一方、第3ピリオド終了時点での大きなリードから第4ピリオドで逆転されるというケースは、試合終盤での大逆転という意味合いになる。試合が随分と進んで、ここで大きなリードを得ていたならば、ほぼ勝利が手に出来るだろうと、勝負の行方をだいたい予測することが可能になるタイミングといえる。先に述べた第2ピリオド終了時点よりはるかに試合結果の予測は容易となろう。そのため、第2ピリオド終了時点よりも、第3ピリオド終了時点の方が、勝ったと思う気持ちが強くなるのではないかと思われた。そういうことが影響して第4ピリオドは第3ピリオドよりも得点が少なく、失点が多くなるのではないかと予想した。しかし、分析結果はそれを裏付けるような、第4ピリオドがその直前の第3ピリオドと比べて得点が少なく失点が多くなるという傾向は認められず、チームの勢いの逆転現象を見出すには至らなかった。

これについては、リードしているチームからすると、最後の第4ピリオドあと10分ということで、ラストパートの気持ちが芽生えたのではないかと考えた。逆にリードされている方は、中村<sup>9)</sup>が述べるような「第3ピリオド終了時点で10点の差をつけられると第4ピリオドでの逆転はかなり苦しい」という大変きびしい状況であるが故に、半ばあきらめの気持ちが芽生えたのではないかと考えた。第4ピリオドでこれほどの差が開いてしまつては、前出の「リードしている選手が守りに入り、リードされている選手が思い切り向かっていく」<sup>9)</sup>という状況にはなりにくいのではないかと考えられる。

## V. 最後に

ここまで、主に選手心理の観点から、どのようにして大逆転負けが生じるのかに関する考察を行い、この問題の究明に向けてのいくつかの手がかりを得たと考えている。しかし今回の研究においては、直接選手にインタビューするなどの調査をしてはいないので、はっきりしたことが言えないところも多い。直接的に確かめることは大変な困難が予想されるわけであるが、避けては通れないことでもあると思われる。また、他の多くの観点、要因からの分析も必要となろう。今

後、この研究で得た知見やより多くの要因を考慮しながらさらに研究を進めたいと考えている。

#### 引用・参考文献

- 1) 月刊バスケットボール11月号(2006), p.11, 日本文化出版社, 東京.
- 2) 森 祥治(2002)クォーター制を味方につける Part 2 高校生指導の現場から, p.16, バスケットボール・マガジン10(6), ベースボールマガジン社, 東京.
- 3) 中村紀男(2003)私のリスク・マネジメント Part 3 高校生指導の現場から, p.22, バスケットボール・マガジン11(1), ベースボールマガジン社, 東京.
- 4) 日本経済新聞運動部編(2002)敗因の研究〔決定版〕, 日本経済新聞社, 東京.
- 5) 前掲書:プロローグ, p.7.
- 6) 岡沢祥訓(2001)卓球に学ぶスポーツ心理学メンタルを考えよう, p.119-120, 卓球王国, 東京.
- 7) 佐々木直基, 岩田真一(2006)大逆転負けを避けるためにどうすべきであったかー大学女子バスケットボールの事例を通してー, 日本スポーツ心理学会第33回大会研究発表抄録集, p.130.

(平成19年9月13日受付)  
(平成19年11月15日受理)

